



『注目を浴びる産業遺産』

日本の世界遺産に3件の産業遺産

近年、日本の世界遺産に「石見銀山遺跡とその文化的景観」や「富岡製糸場と絹産業遺産群」「明治日本の産業革命遺産」など、産業遺産と呼ばれる分野の登録が相次いでいる。現在日本には、文化遺産16、自然遺産4、計20の世界遺産があるが、暫定リストにはさらに「金を中心とする佐渡鉱山の遺産群」が産業遺産として掲載されており、今日工業力において世界有数を自他共に認める日本が、どの様に近代化、工業化を達成してきたかが、世界的に発信され、関心を集めているといえよう。

産業遺産の価値をどう保存するか？

この登録された世界遺産は、継続的にその価値や意義について調査し、保存管理、整備計画などを策定して実行し、報告する義務があるのだが、産業遺産には一筋縄では行かない課題が多い。当初から産業遺産の世界遺産登録に関わってきたが、特にこれまで保存や修復が行われてきた文化財史資料は、歴史的な建造物や絵画や美術品などのように、その修理や修復、復元や複製が価値を損なわない手段として蓄積され、行われてきた経緯がある。しかし産業遺産は、

「産業遺産は、歴史的、技術的、社会的、建築学的、あるいは科学的価値のある産業文化の遺物から成る。これらの遺物は建物、機械、工房、工場及び製造所、炭坑及び処理精製場、倉庫や貯蔵庫、エネルギーを製造し、伝達し、消費する場所、輸送とその全てのインフラ、そして住宅、宗教礼拝、教育など産業に関わる社会活動のために使用される場所から成る。」

（国際産業遺産保存委員会（TICCIH））

と定義されるように、その対象が極めて広範であり、また

産業遺産としての歴史的、技術的価値などが生まれる中で、大半の産業遺産には改良、更新が行われており、すべてを保存することはもちろん、遺産として何をどう保存すべきか、その評価法も蓄積も世界的にほとんどないのが現状なのである。

現在、産業技術史資料情報センターでは、このような産業遺産に関わる分野の系統化調査を実施したいと考えている。保存や活用についての試行錯誤も含め、一つ一つの事例を蓄積していくことが、産業遺産だけでなく、実は博物館にとっても有用な蓄積になると考えている。



左：石見銀山構内調査（1999年）

右：大間湾に残るトラス橋と護岸（佐渡金山）

明治25年に完成した大間湾には、往時からの護岸やクレーン台座やトラス橋が残っており、その保存方法が検討されている。



軍艦島（長崎・「明治日本の産業革命遺産」）

長崎にある端島（軍艦島）には、大正5年建設の日本最古の鉄筋コンクリート建造物など数十棟が現存するが、種々の施設機能も含めてその保存方法は確立していない。

研究者に
聞いてみました！

1) 専門は何ですか

江戸時代から宇宙ロケットまで、日本における技術、モノづくり発展の状況を研究しています。現在の技術やモノづくりについて、その原点や発展の要因を調べていたら、いつの間にか幅広くなっていました。

2) これから取り組んでみたい研究は

日本の近代化以前、江戸時代のモノづくりについてもっと調べてみたいです。そこが日本のモノづくりの原点だと考えています。

3) 自身の研究内容と社会、一般との接点は

世界遺産などもそうですが、日本のモノづくりに社会的な関心が高まっていると感じています。社会や多くの人が知りたいと思っていることを、博物館の展示などを通して、

分かりやすく伝えられればと思っています。

4) 研究する上での苦労や悩みなどはありますか

技術分野は日進月歩が激しく、また専門分化しているので、博物館のような俯瞰的な視点で技術を見る場合に、いろいろな方々の協力や資料を参考にしますが、それがどんどん難しくなっていて、これからは一人ではなく、チームのような形が好ましいと思っています。今、その方法を思案中です。